整理番号

D－2－3　　793

標 題 名

稲作関係のチラシ４件

著 者 名

発行者名

宮城県

発 行 年

昭和１０，１６など

製作年月

平成２９年３月

稲 作 関 係 の ち ら し

昭和十年、十六年など

宮 城 県

種籾の消毒法

昭和九年産の種籾には稻熱病に罹つて居るもの多いから稻熱病豫防の第一手段として種籾をフォルマリン消毒の上播種することは稻熱病のみならず稻馬鹿苗病稻苗腐敗病の豫防にも効果があるから此の際出來るだけ實施することは肝要である

一　フォルマリン種子消毒法

四斗樽を使用して消毒する場合には種籾二斗五升（消毒前一晝夜浸漬し置くこと）をフォルマリン稀釋液（五〇倍液）約一斗二升（五〇〇瓦入一壜を約一斗一升八合の水に稀める）に三時間浸漬し取り揚げ水洗の上通常の浸種（十日内外）を行ひ播種するのであるフォルマリン液は一回浸種すれば液の約一割を減ずるを以て同一濃度の液を別に調製し置き不足分を補充することが必要である又液はフォルマリンの氣散に依り殘液は稀薄となるを以て其の殘量の三分に相當する量（約三合二勺）のフォルマリン一〇倍液（五〇〇瓦入一壜を約二升三合七勺の水に稀める）を毎回補充すれば略原稀釋液の濃度となるが殘液を翌日迄保存し置き使用しないがよい

二　消毒上の注意

(一)　古種籾登熟不良の種籾も藥害なきを以て消毒して差支なし

(二)　發芽せる種籾は藥害あれば消毒せざること

(三)　種籾消毒後貯藏する場合には水洗し蔭乾すること

(四)　消毒時間は三時とすること

(五)　フォルマリンは日光に當る場所又火氣の近くに置くと危險であるから冷暗處に置くこと

(六)　フォルマリンは壜の栓を長く取り置くと効力を減ずる

昭和十年三月

宮城縣廳經濟部農務課

籾種の新らしい消毒法

稻熱病、馬鹿苗病等の病害豫防の爲に籾種をホルマリンで消毒することは今では農家の年中行事の一つとして普及して居りますが、今年からホルマリンの節約と共同作業による能率増進の立前から次の様な方法を採ることになりました。

新らしい方法による消毒の効果は今までの方法で消毒したものと同様でしかも藥は從來より少くて足りますから部落毎に共同して消毒しお米の増産に御協力を願ふと共に大切なホルマリンの節約を望みます。

消毒法

準備　藥品と道具は次の様なものを準備して置きます、數量は消毒する種子の量で加減します

(1) 消毒液　ホルマリン　五十倍液　ホルマリン小瓶一本(一封度入)を清水一斗二升五合に溶かせば五十倍液となる、之を四斗桶に入れて置く

(2) 補充液　ホルマリン　二十五倍液　ホルマリン小瓶一本(一封度入)を清水六升二合に溶かし桶又は瓶に入れて置く

(3) 桶　數個用意し　ホルマリン、水を盛る

(4) 莚　多數用意し　一部は桶の蓋とし他は濕して種子を包むに用ひる

(5) 大笊　數個　種子を入れホルマリン液に浸すに用ふ、桶の數より多く用意するが作業し易し

(6) 枡、栓抜き　柄杓等を用意する

方法

初回　二日間浸種した籾を笊に取り充分に水を切る、之を五十倍のホルマリン液を盛つた桶に浸し藥の良く行きわたる樣かきまぜ　二十分後取り出し其儘十文字に重ねて敷いた濕莚の中央にあけ山盛りに堆積し莚の四隅を折つて籾を包むこと三時間にして包を解いて水洗ひし普通の浸種を行ふ

二回目以降　浸漬の方法は初回と全く同樣であるが一回の消毒でホルマリン液が一割位減るから消毒毎に二十五倍のホルマリン液(補充液)で減つた量だけ補つて濃度の適正を期する

共同して數個の桶を使つて消毒すれば少人數で大量の籾を消毒することが出來る。

從來の方法と異る點

從來の方法は五十倍液に三時間浸漬したのであるが新法は浸漬時間は二十分で其後三時間堆積して置く點が異ふ。

注意

(一) 一封度のホルマリンで五十倍液一斗二升五合出來、之で一回で二斗五升位の種子の消毒が出來る。

(二) 桶には最初の水位に標識をつけ置き補充液の補充に便する。

(三) 莚二枚を十文字に重ねたもので六斗位迄被覆出來る。

(四) 堆積被覆中は籾の乾燥しない樣に注意が肝要なり。

(五) 部落内の消毒の日を前以て定めて置き其の豫定で浸種すること。

(六) 異品種が混らぬ樣同一品種は取纒めて消毒すること。

(七) 作業は日蔭で且つ水洗に便利な場所を選ぶが良い。

(八) 同一液を十回以上連續使用すること。

(九) ホルマリンは有毒故誤の起らぬ樣注意すること。

(一〇) 消毒を終つた廢液は藁、温床框、温床用障子等の消毒に用ひ無駄にせぬこと。

宮城縣

稲作作業日程表（苗代之部）

（現 古川市）

志田郡村組合

作業時期	主要作業	注意事項
三月十五日迄	稲作諸準備完成	種籾、肥料、農機具諸材料などの準備を完了すること
三月　日	苗代の區劃割	苗代の面積が割合狹いので年々苗不足を見る向があるから本田一反歩に對して苗代を十五坪の割に擴張すること、又粳糯の境界又異品種の境界には假畦を設けて混淆せぬやうにすること
三月　日	苗代の再耕及株拔き	前年秋に荒起して置いたものを土の乾いたところを見計ひ小切りをしながら稻株を拾ひ出すこと
月　日	防風牆つくり	苗代に風の來る方向例へば西北の方又海岸地方では東北の方に葦簀圍を設けて風を防ぐこと
四月　日	石灰窒素施用	「ユリミ、ズ」の驅除を兼ねて肥料として石灰窒素を施す場合には播種の二週間位前に田面に撒布し淺く小切りを行ふて土と混ぜ水を引入れて土の濕める程度にして置くがよい
四月一日	畦畔塗り	
四月一日	塩水選（共同作業）	平年でも塩水選は行はねばならぬが昨年は登熟が充分でないものか多いから是非選種を入念に行ふこと　塩水の比重及び水一斗に對する食塩の割合は次の通りにすること　選種は先づ唐簀選を行ひ更に塩水選を行ふこと 淡水の場合　海水の場合 粳無芒　一貫二〇〇匁　〇貫九〇〇匁 仝有芒　〇、八〇〇　〇、六〇〇 糯　〇、六〇〇　〇、四〇〇 昨今は食塩が不足であるから海岸地方などでは海の水を利用すると食塩を用ゆる量が少くて塩水選を行ふことが出來る。塩水選を終つたものは清水で洗つてから浸種すること
四月三日	種籾の消毒（共同作業）	種籾には稻熱、胡麻葉枯、馬鹿苗等の病菌が附着して居るから之を殺すために次の方法で消毒を行ふこと 「ホルマリン」五〇倍液に二〇分間浸漬した後濡れ莚にて三時間覆ひ置き水洗後浸種を行ふ。又はウスブルン一〇〇〇倍液に浸漬したる後浸種を行ふこと 浸種は池又は川に浸す場合は水面より一尺以下に沈めて置き又時々上下を反轉すること 桶浸しの場合は毎日又は隔日に水を取換えること 浸種の期間は十日を標準とすること
四月三日	荒代	
四月十二日	施肥及中代	苗代一坪當り硫安　匁過燐酸石灰　匁を撒布して代搔をなし代均を行ふ
四月十三日	短冊つくり	水を排除して床の幅四尺、溝幅八寸の標準にて短冊形に播床をつくる
四月十二日	種揚げ及催芽	約十日間浸種を行ふたものは種揚げを行ひ肩張乃至二―三分程度の催芽に止めて播種するがよい（餘り長く催芽したものは腐敗病、馬鹿苗病等種々の障害の原因になるから芽の長さを前記の程度に止めることが肝要である）
四月十四日	「ウスカワ」豫防	播種の前に床面の水を排除し石灰硫黄合劑二〇倍液を坪當り三―五合の割合で噴霧器で床面に撒布し藥劑の乾いた後（普通三時間）に水を引入れて置く
四月十五日	播種	天氣を見計ひ朝風の立たぬうちに播くこと、床面の水を排除し草木灰坪當り匁を撒布すること（草木灰は荒代の前に撒布してもよい）　種籾は坪當り　合の割合で厚薄のないやうに均一に播くこと　挿秧の遲れる場合には特に薄播して置くこと
	水の掛引	水の掛引は育苗上最も大切なことだから朝晩苗代を見廻ること　成るべく溫い水をかけるやうにする爲めに苗代附近の水田を溫め場として水を溫めること 水の深さは寒い日は深水とし暖い日は淺水とすること、この場合すつかり水を落して日干しないこと　但し播種十五日以後になつたら曇天で暖かな日又は曇天で暖かな夜は完全に水を落し芽干すると丈夫な苗をつくる上にきゝめがある 夜干の場合には翌朝溫度が下つて大害を來す事があるから夜通し之に注意し若し溫度が下る心配がある場合は早速水をかけること 溫暖無風の日を見計ひ水を落し五斗式ボルドー液を坪當り三―五合撒布し數時間後水を引入れること
四月下日	苗腐敗病防除	水を落して坪當り硫安一〇匁を水に溶解して如露で床面に均一に撒布すること 石灰窒素を施した場合には追肥を行はぬこと
五月中日	第一回追肥	第一回追肥同樣に坪當り硫安一〇匁を施すること（石灰窒素を施した場合又は肥沃な苗代に於ては追肥を行はぬこと）
五月　日	第二回追肥	挿秧十日前頃には防風牆を除去して苗を强剛に育てること
五月中日	防風牆徹去	稗、馬鹿苗は完全に拔取ると共に叮嚀に除草すること
五月下日	稗拔き	病害蟲の防除 病蟲害の防除は其の發生前又は發生の極く初期に驅除豫防すること 螟蟲は蛾を捕殺し採卵をなし藥劑撒布の場合は煙草粉坪八―一〇匁早朝撒布するか硫酸ニコチン八〇〇倍液を坪當り二―三合噴霧器にて撒布すること 泥負蟲發生の場合は砒酸石灰二〇匁大豆展着劑一〇匁水一斗の割合にて作つた液を坪二―三合撒布すること ウンカは苗代末期に除蟲菊劑を撒布し驅除すること

水稻簡易溫床苗代育苗法

標準四月十五日播種

作業時期	作業の種類	注意事項
	場所の選定	北西に自然の墻壁ありて風當り少く陽當良く排水良好にして管理に便なる宅地内又は居宅附近の畑地を選定すること
	融雪の促進	積雪多き地帶は黑色土壤を撒布して融雪の促進に努め或は除雪を行ふ尙排水溝を設け土地の乾燥を圖ること
	品種の選定	陸羽一三二號、愛子一號、農林一六號の中より環境により適宜選定すること
	種籾の豫措	鹽水選は水一斗につき食鹽一貫二〇〇匁（粳無芒）の溶液にて行ひ後清水にて水洗する種子は浸種二日後フオルマリン五十倍液に三時間浸漬消毒し水洗後浸種を續行する浸種は十日間とし肩張程度に催芽すること
四月五日	木框及油障子の準備	木框は巾四尺、長さ適宜とし、前方八寸、後方一尺、厚さ五分以上の丈夫な板にて間隙無き樣製作。本田一反歩當四坪を要す。框の上面二尺毎に巾一寸內外、厚さ八分—一寸位の支へ棒を渡す（上面には五六分深さの溝を堀り雨水の浸入を防ぐ）油障子は巾三尺、長さ四尺一寸のものを用ひ、强靱なる和紙を蕨粉を用ひ丁寧に張り着け乾きたる後荏油一升に石油四合位を混合せるものを火鉢の上にて三回位に之を塗布する其他障子の開閉に用ふる段木被覆用の古菰等を準備する
四月十日	床土の準備	床土の肥痩混合し表面を均平となし播種直前木灰一二〇匁を床面に撒布する
	床土入れ	床土は前年秋豫め培養し置きたるもの約五寸の厚さに篩通となし均平に入れること
	床孔堀り	床孔は深さ二寸位とし木框を据える、木框には周圍に杉葉を立掛け土を覆つて置く
四月十五日	播種 自四月十日至四月二十日	播種前床面に充分灌水し置き坪當五—六合（浸種籾は約六—七合）を均平に播き覆土したる後板にて輕く鎭壓す覆土は川砂六に培養土四の割合に混合せるものを篩にて二—三分の厚さに覆ひ如露にて灌水する
十六日より四月下旬迄の管理	灌水	日當り良き場所に桶を据え之に汲み置き溫めたる水を細目の如露にて發芽揃迄は充分灌水するのであるが天候や床土の狀態により適宜加減すると共に其の後は每日漸減して本葉二枚後に至れば乾燥を防ぐ程度に止むるものとす
	障子の取外し	發芽揃迄は灌水除草檢溫以外は障子はその儘となし夜間及雨天の際は莚又は菰を掛けて置く尙油障子が破損した場合は速に修理することを怠つてはならぬ發芽揃後にありては開閉に注意し溫暖の日中は高溫に失せざる樣注意し段木にて加減する、田植十日前後には障子を取除き健苗の育成に努むること、但し晩霜に注意を要す
	立枯病の防除	立枯病は此の時期（播種後十五—二十日位）に發生し易いものであるから豫防として四斗式過石灰ボルドウ液を坪當四—六合撒布し萬一發生したる場合は直ちに拔取り被害場所及周圍にボルドウ液又はウスブルン八〇〇倍の溶液二—三合（坪當）を撒布し消毒して置くこと
	其の他病害	稻熱病發生の恐がある場合は勿論移植前必ず四斗式過石灰ボルドウ液坪當四—六合を撒布すること、尙泥負虫發生地帶にありては拔取前水一斗に砒酸石灰二〇匁液を坪當二—三合撒布すること
	追肥	苗生育の不良なる場合は追肥として硫安一〇—二〇匁を二—三回に分け水に溶し如露にて撒布する、撒布後清水を掛け洗滌して置くこと
	除草	雜草は生え次第之を丁寧に拔き取ること
五月二十日頃より挿秧迄	移植數日前の管理	苗の强剛なる生育を圖る爲油障子は晝夜共取除き置くが晩霜には特に注意が肝要である
	苗の拔取り	前日充分灌水し置き莖葉及根を傷めぬ樣移植鍬にて丁寧に拔取ること
	挿秧	溫暖無風の日を選び淺植とし坪當七〇—八〇株一株苗數二—三本とすること挿秧期は普通苗代のものより必ず早植とすること又早植の爲病害虫の寄生多きを以て硫酸ニコチン又は砒酸石灰を撒布の後挿秧するを安全とす
	挿秧後の管理	普通水苗より早期に挿秧せらるゝ爲成るべく昇溫せる水を灌漑すること除草其の他作業は可成早目に行ふこと

昭和十六年三月

宮城縣經濟部

植物防疫資料館
C-504-4044
液山甫治
寄贈
P
2-3
793